

今月のみことば 2016年8月

「だれにも、どのようにも、だまされないようにしなさい。なぜなら、まず背教が起こり、不法の人、すなわち滅びの子が現れなければ、主の日は来ないからです。彼は、すべて神と呼ばれるもの、また礼拝されるものに反抗し、その上に自分を高く上げ、神の宮の中に座を設け、自分こそ神であると宣言します。」（Ⅱテサロニケ2章3, 4節）



映画『レフト・ビハインド』より

ギスカラのヨハネ

上記のみことばは、終末の時代に現れるとされる、いわゆる「反キリスト」に関する有名な箇所である。一部の注解書によると、混乱する世界を、そのカリスマ的指導力によって統一する指導者が出現し、世界は彼にひれ伏し、その後、「再建されたエルサレム神殿」に上り、自分が神であると宣言して、その凶暴な本性を現わし、世界は未曾有の「大患難時代」に突入する、という。

そうなのかもしれない。しかしそのように現代に引き寄せて解釈する前に、知っておかなければならないことがある。それはここで言う

「神の宮」である。現在、エルサレムにかつての神殿はないから、やがて新たに神殿が再建されることになる、と推測する人が多いが、Ⅱテサロニケという手紙が書かれたのは神殿が崩壊したA.D.70年よりずっと前のA.D.53～54年であることを見落としてはいけないだろうか。つまり、筆者パウロは未来の神殿ではなく、当時建っていた神殿のことを指していたと考える方が自然なのである。そうだとすると、「不法の人」とは、遠い未来に出現する「反キリスト」というより、エルサレムが崩壊する前の人物でなければならない。

果たしてそのような人物がいたのであろうか。

同時代のユダヤ人歴史家ヨセフスは、興味深い人物のことを伝えている。それが「ギスカラのヨハネ」である。

彼はローマ帝国と戦うことを選び、籠城作戦に出た。エルサレムには数年分の食糧が蓄えられていたが、何と彼は食料庫に火を放ち、退路を絶ったのである。かくして絶望的な戦争が始まり、後戻りはできなくなった。権力を掌握した彼は、神殿を自分の本部と定め、そこから指令を下し、まるで神のように振る舞った。食糧が尽き、エルサレムでは疫病と死が蔓延した。ついにローマ軍が城内に攻め入ったときには、累々と死体が横たわり、生き延びた者も、亡霊のようであった、という。まるで黙示録の世界そのものである。

このように、同胞を欺き、滅亡に追いやった人物こそ、第一義的にはここでいう「不法の人」と考えるべきではないだろうか。

1941年、軍部は勝算なき対米戦争に国民を駆り立て、日本は滅亡の淵に立った。日本にもエルサレム滅亡と酷似した過去があったのである。日本国憲法の「改正」が現実味を帯びる中、首相に一切の法律を一時停止させるほどの権限を与える「緊急事態条項」をもちこむことは、「ギスカラのヨハネ」のような人物にフリーハンドを与えることにつながるであろうか、と危惧する。